

胆道閉鎖症早期発見へ

肝臓から腸に胆汁を運ぶ管が生まれつき、または生後間もなく詰まってしまうと「胆道閉鎖症」という病気が引き起こされる。赤ちゃん約1万人に1人がかかるまれな病気だ。放置すれば肝硬変が進行し命にかかわる。できるだけ早く発見し、手術を受けることが長期生存への道だが、治療が遅れるケースが後を絶たない。この病気には便の色が薄くなる特徴がある。赤ちゃんの便と色見本とを見比べて、早期発見を助ける「便色カード」が4月から母子健康手帳にとじ込まれた。

4月から母子手帳にとじ込み

7段階 生後2週から点検

健康な赤ちゃんの便は通常、生後48時間以内は緑がかった黒色で、同2〜4日目ころは黒緑色と黄色が混じり、次第に黄色味が強くなる。さらに乳汁をたくさん飲むようになると、黄色から茶色へと変化していく。

一方、胆道閉鎖症の赤ちゃんの約70％は生後4週までに

に、残る約30％も2カ月までに、便の黄色味が薄い淡黄色便の症状が現れる。便に色を付ける「材料」は胆汁。薄い色は胆汁の流量が少ないことを表している。便色カードは、灰色がかった白色から茶褐色まで7段階の色を示し、保護者が赤ちゃんの便と見比べられるよう

き合わせて番号を記入してもうらえば、あいまいさを排除できる。危険信号を確実に医師に伝えられます」とカードを考案した松井陽・国立成育医療研究センター病院長(小児科学)は話す。

手術の割合上昇

松井さんら厚生労働省研究班は、2007年までに便色

うにした。生後2週、1カ月、1〜4カ月の少なくとも3回チェックし、実際の便がどれに最も近いか、それぞれの色にふられた1〜7番の番号を記入する。もしも薄い方の1〜3番に近ければ、一日も早く小児科医などの診察を受けるよう勧めている。

治療では、閉塞した胆管を切除して肝臓と腸をつなぐ、日本生まれの「葛西手術」が行われる。問題は、手術時期によって、その後の生存率に大きな差が出るからだ。

「生後60日までに手術すれば術後20年の生存率は43%、61〜90日では33%、91〜120日では25%、121〜150日では7%と低下し、151日以降ではゼロ。だからこそ早期発見が大切なのに、60日以内に手術を受ける赤ちゃんは全体の約40%にすぎません」と松井さんは嘆く。

あいまいさ排除

従来の母子健康手帳にも、便の色について注意を促す記述はあった。だが、色調の見本はなかった。「灰白色か薄い黄色と言葉で言われても、人によって思い浮かべる色は千差万別です。見本と突

た白色から茶褐色まで7段階の色を示し、保護者が赤ちゃんの便と見比べられるよ

①母子健康手帳にとじ込まれた便色カード
②便色カードを考案した松井・国立成育医療研究センター病院長



安心・安全

吉バゴジバ

松井さんによると、胆道閉鎖症は原因不明の炎症によって胆汁の通り道である胆管が閉塞する。胆汁は腸で脂肪の消化吸収に重要な役割を果たすが、閉塞のため肝臓内にたまり、組織を傷めて肝硬変を起す。淡黄色便のほかにも黄疸も現れるが、生後1カ月ごろは見逃されやすいとい

患者団体「胆道閉鎖症の子どもを守る会」の竹内公一代表は「医師でも知らない人がいるまれな病気です。便色カードが普及して認知度が上がる意義は大きい。十分に活用して早期発見に役立ててほしい」と期待している。